

## 五里合の復興歌／地域再生への思い新たに

谷口吉光（秋田県立大学）

「ゴーがつついたち ごごさんじー」

子どもたちの元気な歌声が響き渡る。ここは男鹿市立五里合小学校の音楽室。四年生から六年生まで 29 人が地震の避難訓練の後で行われた特別授業「復興歌に学ぶ」に参加して、「復興歌」を歌っているのだ。

今から 74 年前の 1939 年（昭和 14 年）、男鹿半島を震源とするマグニチュード 6.8 の大地震が起こり、全県で死者 27 名、住宅の全半壊 2 千戸以上という大惨事を引き起こした。五里合でも 6 名が亡くなり、家屋倒壊や地割れなどの被害が続出した。

そんな混乱の中、五里合尋常小学校の柴田金雄先生たちが子どもたちを勇気づけるために歌を作った。それが「復興歌」だ。「五月一日午後三時 男鹿の山河地は震い」で始まるこの歌を柴田先生は朝礼で繰り返し子どもたちに歌わせたという。

ずっと忘れられていた復興歌が再び知られるようになったのは、一昨年市民団体による男鹿の災害調査がきっかけだった。五里合のある方が「男鹿地震は 5 月 1 日午後 3 時に起こった」と日時を正確に言えたことに驚いて、「なぜ正確に憶えているのですか」と聞いたところ、「実は歌があった」という話が出てきたのだ。

その歌を歌える人を探したところ五里合の S さんにたどり着いた。S さんが歌を正確に憶えていたため、それを将来に残そうと録音・採譜して、地震が起こった 5 月 1 日に五里合小学校で子どもたちに歌ってもらったというのがこの特別授業のいきさつだ。

縁あって私もこの復興歌の復活に関わり、昔の人の志の高さと郷土に対する愛情の深さにすっかり心を奪われてしまった。特に「復興しよう」と歌っているのが日本国でも秋田県でもない、自分たちのふるさと五里合村だったということがすごいと思った。

「奮い立たずやわが郷土に  
今暁の鐘鳴りわたる  
村是かざして行くところ  
睦びあいつつ五里合の  
のぞみ新に芽ぐむなり」

この時代の五里合には、暮らしの根元に「村」というものがどっしりと存在し、村人の希望も未来もそんな根元から伸びる若芽のように感じられていたのではないだろうか。

しかし、残念ながら、そんな誇り高い村の伝統は衰え、少子化のため五里合小学校は統廃校が検討されている。当時 2 年生だった S さんが「意味もよくわからずに」憶えていてくれたおかげで、復興歌は再び私たちの財産となった。この思いを受け継ぎ、再び若者が村に戻り、子どもが生まれ育つ地域社会を作っていくこと。それが私たちの世代の責任だという思いを新たにしている（復興歌の歌詞全文はインターネットで検索できます）。

（朝日新聞あきた時評 2013 年 5 月 22 日掲載分を加筆・修正した）